

# Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

## 温かみたたえた曙色の病院という「街」

聖路加国際病院(東京都中央区)



旧病院棟のチャペル。毎日曜日の礼拝や結婚式・葬式などの儀式、パイプオルガンの演奏会に利用されている

**聖**路加国際病院の歴史は1902年にさかのぼる。当時、外国人居留地だった東京・明石町の病院を、プロテスタント教団・米国聖公会が派遣した弱冠26歳の宣教医師、ルドルフ・B・トイスラーが買い取り、聖路加病院として創設した。

その後、14万2800人の死者・行方不明者を出した23年の関東大震災で病棟は倒壊。33年に再建された。チェコ人によって設計されたネオ・ゴシック様式の建物はトイスラーの出身地ボストンの総合病院をモデルとしている。

近年、建物の神経・血管に相当する配管系統

の老朽化が著しく、再開発計画が持ち上がった。当初は旧病院棟もすべて取り壊す予定だったが、昭和初期に医療界の話題を独占したチャペルを含む建築を保存してほしいと日本建築学会が要請。設計変更が施され、忠実な保存修復が行われた。十字架を戴く旧病院棟は聖路加のシンボルとして今も往時の面影を伝えている。

再開発で新たに建設された建物は二つある。一つは新病院棟。もう一つは47階建てと38階建ての超高層建築が肩を並べる聖路加タワー。建設に当たっては、当時の院長をはじめ、設計・施工か



77年の歴史を重ねる旧チャペル。パイプオルガン上部の明るい6階部分は当時の小児病棟ナースステーション。車いすやベッドの患者もそのまま入れる「多層会衆式」を採用



新病院棟の屋上庭園は患者が四季折々の植物や小鳥、蝶、トンボなどと接する場。遊具は寄付によって作られた。右手の新病院棟の壁は「曙色」



新病院棟の新しいチャペル。毎朝の礼拝や職員会議にも利用される。患者や職員の憩いの場



廊下の市松模様は旧病院のデザインを踏襲。奥には世界最小のスターバックスの店舗



新病院棟1階の廊下。院内の壁面には寄贈された美術作品が展示されている



左が旧病院棟、右が新病院棟。右手奥は聖路加タワー。新病院棟の手前の小さな洋館はタワー建設時に移築復元した「トイスラー記念館」

ら家具、照明、造園に至るまでの主要スタッフが渡欧。先進的な病院建築を学び、取り入れられるものは全て取り入れた。

「日本には本当に温かみのある病院らしい建築が少ない。病院利用者の主人公は患者です。患者の立場で設計を考えれば、おのずと答えは出る」

そう語るのは、同病院の小室克夫・施設環境整備課マネージャー(一級建築士)。荘厳なたたずまいのチャペル、寄付で作られた遊具のある新病院棟の屋上庭園、昭和初期の風合を残した病室や廊下の柔らかな照明まで、ホスピタリティーにあ

ふれた工夫と遊びが随所に見られる。

新病院棟の外壁は旧病院棟と同じ色に統一されており、日の出直前の空を思わせる「曙色」は聖路加のイメージカラーともいえる。

ここでは建物の所在地を「街区」と呼ぶ。病院を中心に一つの街が形造られているようだ。

「建物は生きている」が持論の小室氏。細かなメンテナンスを少しずつ繰り返しながら、積み重ねながら、新旧の建築は今日も患者を迎え入れている。

「癒しの空間、healing environmentは特別じゃない。当たり前のことなんです」(小室氏)

# 「光・風・緑・海」があふれる穏やかな空間 癌研有明病院(東京都江東区)



吹き抜けから自然光が差し込む「ホスピタルストリート」  
(写真提供:清水建設、写真撮影:エスエス東京)

東京臨海副都心の有明地区に建つ癌研有明病院。がん専門機関として癌研究会が1908年に発足。以後、施設は変遷を重ね、大塚(東京都豊島区)で63年から77年にかけて整備されてきたが、老朽化・狭隘化したことから、2005年にこの地に移転した。

設計は丹下健三・都市・建築設計研究所(現丹下都市建築設計)と清水建設。当時院長だった武藤徹一郎名誉院長は「病院なので都庁のようにかめくしないしてほしい」と注文を付けた。建物はシンプルで、病院らしくないモダンなデザイン。しかも機能的な構造となっている。

病院の正面玄関を入ると、南北に貫く「ホスピタルストリート」を中心に、いくつかの機能が効率的

に配置されている。まず玄関周辺は、受付や薬局などの一般外来スペースになっている。中央部分は、自然光が降り注ぐ吹き抜けで、2階に上がるエスカレーターやエレベーターが設置されている。グランドピアノも置かれ、ボランティアによる運営でコンサートも定期的に催される。ストリートの最も奥にあるのがアメニティスペース。レストランやコンビニ、屋外庭園と患者と家族のための施設が並んでいる。

2階はがん疾患専門外来だ。診察から検査・治療までをこの階で受けることができる。専用の内廊下を職員が移動することで、患者の負担が軽減される。患者は受付で渡されるPHSのバイブレーションによって誘導されるため、患者を呼ぶアナウ



ホスピタルストリート中央では定期的にコンサートも行われている



すべての個室に飾られている絵画



待合ホールの壁にも多くの絵画や写真が飾ってある



12階の庭園からは東京湾を望むことができる



女子美術大学同窓会が寄贈した桜の絵



葉っぱ形のテーブルなど温もりのあるデイルーム  
(写真提供:清水建設、写真撮影:エスエス東京)

なはなく、広い待合ホールは静かだ。対面の壁には写真や絵画が多数飾っており、心和む。

病院所蔵の絵画や写真は約800点。すべて寄贈を受けたもの。建造時に壁にレールを付け、いつでもどこでも飾れる体制になっている。武藤名誉院長を委員長とするアート・イン・ホスピタル委員会で場所を検討し、約600点が飾られている。1～2階の壁や廊下が中心だが、病床数700床のう

ち4分の1を占める個室すべてにも飾ってある。

5階と最上階の12階にも庭園がある。12階の庭園は東京湾の風が吹き抜け、患者の日常的な風景として病院が目指す環境テーマ「光・風・緑・海」をまさに体現している。また、この階は緩和ケア病棟だ。末期の入院患者の娘さんがデイルームで結婚式を挙げた後、庭園で記念写真を撮った。患者は数日後、満足げに亡くなったという。